大自然の中で平和を願う

石垣市立石垣中学校　二年　池城　咲花

「ホーホー」「キュールルル」「キキキィ」ここは石垣島のキャンプ場。昼間も最高だが、夜もいろんな生き物の鳴き声でかなりにぎやかになる。私の家族はキャンプ好きで、今年のこどもの日も家族でキャンプをした。その日は、十四夜だった。横になりながら月の明るさに驚いた。波の音。生き物達の音。海からの風。なんと汚れのない、みずみずしくて心地よい世界だろう。自分が石垣島で生まれ、今ここにいる幸せに感謝した。そして、「自然がいつまでも変わらずにあり続けられますように。」と、月に願った。月があまりにも大きいので、願いが叶うような気がした。そして、去年、平和について考えさせられた一連の出来事を思い出した。

去年のキャンプの日の夜、夜中に大きなサイレンが鳴った。携帯電話からも緊急のエリアメールが鳴った。それに気づいた母が「起きなさい。津波警報だよ。高いところに逃げるよ。」と言った。うっすらと目を開けると、辺りが騒がしく、キャンプ場にいた人みんなが慌てて車に乗り込み、避難していた。その様子をみて、やっと事の重大さに気がついた。なかなか起きない妹と弟を、母とどうにか抱っこして車に急ぎ、近くの山に避難した。父と母と兄弟四人、身をよせながら死にたくないと車の中で過ごした。妹や弟を守らなきゃ。私は心の中でつぶやいた。そして、さっきまでの楽しさを思い出し涙が出そうになった。寝よう。そう思っても、すぐに眠れなかった。この時、私は初めて、穏やかな生活も一瞬にして不安や恐怖に満ちたものになるということを経験した。そして、災害もそうだが、国同士の争いに巻き込まれ、命を脅かされている人達の気持ちを想像し、辛くなった。

時代は二十一世紀。ＳＤＧｓの考えの下、生活の中により良い形でＩＴ技術を導入し、快適な暮らしを構築していこうとしている。そんな未来を創ろうとしているにも関わらずいまだ治まらないウクライナ情勢や良くならない米中関係、北朝鮮からの圧力。ニュースで「北朝鮮がミサイルを発射。近くの頑丈な建物の中、または地下へ避難してください。」という緊急速報を耳にする度に、石垣島に対しての速報じゃなくとも、あの津波警報が出た時の恐怖と不安がフラッシュバックする。

慰霊の日の沖縄全戦没者追悼式では、発表された平和の詩に胸をつかまれた。「こわいをしって、へいわがわかった」という詩。あの津波警報の後だっただけに、その通りだと何度もうなずいた。たかが津波警報くらいで大げさだと思う人もいるかも知れないが、一度感じた恐怖や不安は簡単には消し去れない。しかし、それを経験したからこそ、今まで以上に穏やかな暮らしが続くことを望むようになったのも確かだ。

夏休みには、石垣市の平和大使として広島平和祈念式典にも参列した。コロナ禍だったが、亡き御霊に祈りを捧げ、平和を願う人々の多さに圧倒された。こんなにも平和を願う人がいれば、地球上から争いや戦争は消えるのではないかと思ったほどだった。その際に聞いた被爆者の方の話。「空襲警報が鳴ってすぐに、原子爆弾は落とされ、十四万人もの命が一瞬にして消えました。見渡せば、焼けただれた人ばかり、広島が一瞬で別世界になりました。だから、戦争は二度と起こしてはいけません。」あの方の悲痛な叫びは一人の叫びではない。戦争を経験した全ての人々の叫びだ。命を脅かされ、不安な思いで過ごし、未来に夢をたくすことができなかった人々の叫びだ。私はそう思った。

今や自国を守るには、自国だけ守っても守りきれない状況にある。それほど威力のある武器を、大国が持っていると言われている。だから隣国に何かあれば確実に被害を受ける。そうならないために、日本も防衛力を強化しようとしている。しかし、それで解決する問題なのだろうか。しかも、残念なことにその防衛力を強化しようとしている舞台が、またもや沖縄県なのである。米軍基地問題がまだ解決せず、「沖縄戦は続いている」と言われているにも関わらず。

どうすれば戦争が起きないのか。どうすれば平和な世の中が創れるのか。何十年も同じ課題を抱えたまま。けれど、答えは意外にシンプルなのではないかと、私は考えている。自分も他人も大切にする。自国も他国も大切にする。そのために、互いに思いやりの言葉を伝え合い、みんなで命を大切にする。「あなたの国はどうですか。私たちにできることはありますか。」と。

キャンプ場の大自然の中、私を優しく包んでくれている動物たちの鳴き声や草木の匂い、心地良い海風や月明かり、そして安らかな寝息。そんな穏やかな暮らしが、これからも永遠にあり続けられますように。